

生式と並行し、第二期は古墳時代に相当…(中略)…第二期は二、三の段階に分かれて、江別式土器が古く、つぎに北大式…」というように、「続縄文式期」の時間的な位置づけを行った点である。(擦文土器との関係で)どこまでを続縄文とするか、という課題は未だに大きい、「内地」の「古墳時代」に「相当」させる考えを用いれば、この課題は瞬時に解決する。ただし「古墳時代」の範囲も流

表2 辞書類に記載された「続縄文」 ※「江別式」は現在、「後北式」と呼称される場合が多い。

発 表 年	記 述 内 容	文 献
1951 (昭和26年) 酒詰伸男他	<b>接触式土器</b> 「野沢式土器等と云う、縄文とも、弥生式とも判断し兼ねる、云わばその中間的な土器が出て来た。この種の土器は縄文土器と、弥生式が接触して生じた特別の土器であると考えられた。接触式土器と云うのはこれで、…(中略)…近頃になって、漸くこの式らしいものが、遠く中国地方迄分布していることが略明かになって来た。その結果接触式土器は工合が悪いと云うので、次第に <b>続縄文式土器なる言葉が用いられるようになって来た</b> 」	10
1959 (昭和34年) 佐原眞	<b>続縄文式文化</b> 「稲作農業を基盤とする弥生式文化が日本の大部分にゆきわたり、そこでは縄文式文化の伝統が漸次解消していったときに、北海道と奥羽北部地方では、 <b>自然環境が稲作の普及をはばんだために、もっぱら狩猟漁撈の生活に依存し、縄文式土器の伝統を強くのこした土器</b> を用い、石器・骨器を基本的な利器とした文化が、擦文土器文化、オホーツク式土器文化のはじまる時期まで存続した。山内清男はこの文化の土器を <b>続縄文式土器</b> と名づけ…」	11
1962 (昭和37年) 大場利夫	<b>続縄文式土器</b> 「弥生式文化の直接の影響を受けなかった北海道では、本州で縄文式文化が終ってから後にも、なお <b>縄文式土器が停滞した形で存続</b> していた。年代的には弥生式文化時代に相当するが、この時期即ち金石併用期の北海道における縄文式系統の土器を <b>続縄文式土器</b> といっている。」	12
1983 (昭和58年) 石附喜三男	<b>続縄文土器</b> 「北海道を中心とする日本列島北部の縄文文化に後続する続縄文文化期の土器。前半期は <b>石狩平野までの道南部とそれを越えた道東・道北部の2グループのものに分れる</b> 。前者は「恵山式」と総称される土器群で、後者は従来「前北式」とよばれるグループが主体をなす…(中略)…後半期の土器は従来「後北式」あるいは「江別式」とよばれるグループで、4ないし5期に細分編年されるが、 <b>恵山・前北両者の要素の融合一体が認められ、全北海道が文化的に統一化される様相を示す</b> 。その末期には南千島、東北北部にも土器が広まる。」	13
1987 (昭和62年) 菊池徹夫	<b>続縄文文化</b> 「北海道を中心として北日本独特の風土のなかで展開された土器文化。本州が水稻農耕社会に移行…(中略)…引き続き <b>縄文の色彩を強くどめたこの文化が形成</b> …(中略)… <b>猟漁、採集を経済基盤</b> …(中略)…東北地方の弥生文化の影響のもとで成立した恵山(えさん)式土器文化や、道央の、より北海道的な江別(後北)式土器文化など、 <b>地域により複数の系列</b> がある。…(中略)…江別式後半の文化は道南から東北地方にも及ぶ。またこの段階で土師器(はじき)の文化と接触し、 <b>過渡的折衷文化たる北大式</b> を経て擦文(さつもん)土器文化へと移行する。続縄文文化期こそは、その後、稲作農耕社会の中央日本に対し、北日本地域が <b>独特の歴史過程をたどることになる、そもそもの出発点</b> となった時期である。」	14
1993 (平成5年) 山岸良二	<b>続縄文文化</b> 「北海道と北奥羽地方で <b>狩猟・採集・漁撈生活</b> を基盤とする石器・骨器など使用した文化で本州における <b>弥生・古墳時代から奈良時代前半まで継続</b> …(中略)…土器型式から現在大きく <b>二系統</b> に分けられる。道南から北奥羽に広がる「恵山式土器」分布圏と道北を中心に分布する「後北式(江別)土器」分布圏である。…(中略)…稚内市近辺に広がる「鈴谷式土器」分布圏もこの続縄文文化に包括する考えもある。…(中略)…実年代については…(中略)…七世紀には続く「擦文文化」「オホーツク文化」へと変遷していったと考えられている。」	15
1994 (平成6年) 戸沢充則	<b>続縄文文化</b> 「恵山式土器をもつ時期・分布域に顕著な <b>漁撈活動の発達</b> に表徴されるように、 <b>縄文文化の伝統をひく生業</b> が中心であって、本格的な農業生産への転換はなされていない…(中略)…弥生文化との接触はあり、弥生文化特有の磨製石斧や一部では金属器の使用も認められている。続縄文文化の終末期の土器型式である北大式には、すでに本州の古墳時代の土師器が伴う例があり、やがて <b>続縄文文化は擦文文化(道東北部ではオホーツク文化)にかわっていく</b> 。」	16
1996 (平成8年) 森田知忠	<b>続縄文土器</b> 「本州以南の地域では、金属工具を伴う水稻農耕文化が定着し、弥生時代を迎えるが、 <b>冷涼な気候の北海道では稲作が成立しなかったことから、続縄文時代と呼ばれる別の金属器時代</b> に移行…(中略)… <b>続縄文時代</b> はその後、擦文時代の開始される7～8世紀ころまで続いた。この時代に使用された土器を、 <b>続縄文土器</b> という。」	17
2001 (平成13年) 設楽博己	<b>続縄文文化</b> 「北海道では…(中略)…稲作農耕文化を受け入れず、縄文時代以来の伝統的な生活が継続…(中略)… <b>続縄文文化は大きく前半と後半に分けられる</b> 。前半は…(中略)…複数の土器型式が並存していた時期であり、後半に至って…(中略)…北海道一帯を広く同じ型式の土器が覆い、地域色は解消された。前半には…(中略)…沿岸漁業に依存する人びとが残した貝塚と骨角器…(中略)…後半では…(中略)…サケ・マスなどを中心とする内陸の河川漁業に生業のウエイトがおかれるようになった。キビヤツパなどの…(中略)…雑穀栽培を行っていたらしい。東北地方北部には後半の土器を副葬した墓を伴う遺跡が多く、集団移動があったとされる。」	18
2002 (平成14年) 藤本強	<b>続縄文時代・続縄文文化</b> 「本州の弥生・古墳時代にほぼ対応する <b>北海道の先史時代とその文化</b> 。縄文時代に後続し、擦文時代に先行する。水稻耕作を基盤にもつ弥生文化は北海道に上陸しない。この時代の北海道における主たる生業は <b>漁撈・採集・狩猟</b> である。…(中略)… <b>続縄文時代は大きく前半期と後半期に分けることができる</b> 。前半期は地方色が豊かな時代…(中略)… <b>続縄文時代の北海道のいずれの地方でも海洋または河川環境への適応が縄文時代よりはるかに進んだ様相がみられ</b> …(中略)…後半期には、石狩低地帯に前半期の江別式土器につながる後北式(江別式)土器が出現し、続いて最後の続縄文土器となる北大式土器が全道的に広がる…(中略)…前半期にみられた <b>海洋環境への適応度は低下し、河川漁撈が主要な生業</b> 」	19
2003 (平成15年) 斎藤忠	<b>続縄文文化</b> 「 <b>北海道の原始文化</b> に対して設定された名称。 <b>続縄文土器を中心とした文化</b> …(中略)… <b>続縄文文化</b> とは、本州の縄文文化につづいて、 <b>なお存在を続けた縄文文化</b> に対して呼称されている。…(中略)…この文化は、紀元前後のほぼ本州の弥生時代から古墳時代と奈良時代一部にまたがるものと考えられる。 <b>前葉・中葉・後葉の文化</b> にわけられる。前葉には、道南西部の恵山式土器、道央・道東部の前北・後北式土器が発達し中葉には江別C式・C式とが発達し、…(中略)…後葉には北大式土器といわれる土器形式が発達した」 ※「C式・C式」、「土器形式」は原本のまま。	20

動的である現状からすると、山内の示した方式で「続縄文」の終末を決めることは難しい。

### 3. 辞書に記載された「続縄文」(表2)

紙数の都合上、辞書で解説された「続縄文」については次稿に送ることとするが、1つ述べておきたいのは、1959(昭和34)年の佐原眞による「続縄文式文化」の解説が、今現在の我々が抱く「続縄文観」の基礎をなす内容でまとめられていることである。この8年前に刊行された『考古学辞典』(1951)の解説をみると、「続縄文」の考え方は正しく理解されていなかったことが明らかである。このことから、我々がイメージする「続縄文文化」は佐原の解釈が一般化したものであるのかもしれない。

山内(1937)は「考古学上の文化の区分に相応して経済関係の差異が結び付いて居る…(中略)…遺物によって証明し得ない幾多の社会関係或は精神生活の相異も存在したであろう。この方面に関しては…(中略)…今深く論じたくない…(中略)…考古学的事実によって各時代と、現在の原始民族の経済形態との同定を行い、当時の生活の全面的考察の根拠を得たい」と述べている。「文化」や「時代」<sup>3)</sup>の用語を加える前に、基礎研究を優先しようとした山内の意識がうかがわれる。

### 註

- 1) 「続縄文」の用語は、いわゆるミネルヴァ論争の最終論文「考古学の正道—喜田博士に呈す—」(文献2)の中で既に用いられており、喜田貞吉も参加した座談会「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」(文献3)の山内発言の中にも見える。鎌倉時代まで縄文時代の文化が残存した地域があることを説く喜田に対し、山内は縄文時代の終わりは全国的にほぼ同時であったことを力説した。しかし山内は古墳時代まで「続」く「縄文」に気づき、「続縄文」の概念を構築した。「続縄文」の初出時期よりみて、この概念はミネルヴァ論争を契機に提出されたのではなかろうか。(佐原眞(1984)は「ヨーロッパの北欧圏に倣って北海道に続縄文文化を設定した」としている。)
- 2) 雑誌『ドルメン』に7回にわたって連載した「日本遠古之文化」に補註を加え、さらに縄文土器の大別と細別(編年表)をつけて単行本『日本遠古之文化 補註付・新版』として出版したもの。「続縄文」の説明はその中の補註(44)で行われている。
- 3) この文化の継続期間を北海道では「続縄文時代」としているが、東北地方北部への「続縄文時代」の適用は難しい。

### 引用文献

佐原眞 1984「山内清男論」『縄文文化の研究 10 縄文時代史研究』雄山閣  
 藤本強 1988『もう二つの日本文化』UP 考古学選書2 東京大学出版会  
 山内清男 1937「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』第6巻第1号 雄山閣

### 表中の文献

文献1 山内清男 1933「日本遠古之文化 七—四、縄紋式以後(完)—」『ドルメン』第2巻第2号 岡書院 文献2 山内清男 1936「考古学の正道—喜田博士に呈す—」『ミネルヴァ』第1巻第6号 翰林書房(P39(P251)上段10行) 文献3 馬場修・江上波夫・後藤守一・伊東信雄・喜田貞吉・三上次男・山内清男・八幡一郎・甲野勇 1936「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」『ミネルヴァ』第1巻第7号(9月号) 翰林書房(P33(P297)下段9行) 文献4 山内清男 1939『日本遠古之文化 補註付・新版』先史考古学会(P47註448行) 文献5 山内清男 1964「緒言」1964『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社(甲野勇・江坂輝彌との連名) 文献6 山内清男 1964「日本先史時代概説」1964『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社(P145-146) 文献7 山内清男 1964「日本先史時代概説」1964『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社(P147[註11]) 文献8 山内清男 1969「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第1巻 古代く日本く先史—5世紀 学習研究社(P96-97) 文献9 平山久夫・安藤幸吉・中村五郎 編 1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会 文献10 酒詰仲男・遠藤喜彦・平井尚志 1951「接触式土器」『考古学辞典』改造社 文献11 佐原眞 1959「続縄文式文化」『図解 日本考古学辞典』東京創元社 文献12 大場利夫 1962「続縄文式土器」『日本考古学辞典』東京堂 文献13 石附喜三男 1983「続縄文土器」『日本考古学小辞典』ニュー・サイエンス社 文献14 菊池徹夫 1987「続縄文文化」『日本大百科全書』14 小学館 文献15 山岸良二 1993「続縄文文化」『古代史事典』大和書房 文献16 戸沢充則 1994「続縄文文化」『縄文時代研究事典』東京堂出版 文献17 森田知忠 1996「続縄文土器」『日本土器事典』雄山閣 文献18 設楽博己 2001「続縄文文化」『日本史事典』朝倉書店 文献19 藤本強 2002「続縄文時代・続縄文文化」『日本考古学事典』三省堂 文献20 斎藤忠 2003「続縄文文化」『日本考古学用語小辞典』学生社

## 米山(2)遺跡出土の烏帽子について

木村 恵理\*

### 1 はじめに

青森市米山(2)遺跡において中世の井戸跡から出土した漆塗膜の塗膜構造調査及び顕微鏡による織物痕観察を行った結果、烏帽子である可能性が指摘された(青森県教委2020)。烏帽子の出土例は全国的に少なく、管見の限り岩手県平泉町柳之御所遺跡出土烏帽子が最北の事例である(田代2012)。

本稿では米山(2)遺跡出土烏帽子片の構造や素材、製作工程について自然科学分析の結果をふまえて改めて検討し、他遺跡との比較を行うことで本例の特徴を示したい。

### 2 烏帽子とは

烏帽子は古代から近世において成人男性の被り物として用いられた。平安時代末期の12世紀には烏帽子の着用が普及し、社会的地位の上下や職業の別を問わず成人男性が身に着けたとされる(小田1983)。素材は、「初めは黒塗りの絹、紗あるいは麻製と形式が定まっていたが、鳥羽上皇の時に強装束の流行に伴って漆で塗り固めた紙製の烏帽子が現れた」とされている(宮本1977)。

### 3 米山(2)遺跡の概要

米山(2)遺跡は青森平野東部の標高約30~40mの扇状地先端部から扇状地性低湿地に位置する。本センターが発掘調査を行い、12世紀後半~15世紀後半代の集落の存在が明らかとなった。調査では、建物跡のほかカマド状遺構、井戸跡、土坑墓などを検出した(図1)。烏帽子が出土した第71号土坑(SK71)は上端の長軸128cm、短軸125cm、深さ114cmの方形で、形状と掘方から井戸跡と考える(図1)。堆積土中から烏帽子片のほか、砥石が出土した。

### 4 米山(2)遺跡出土烏帽子の検討

烏帽子は複数の破片に分かれており、そのうちの1片で実施した放射性炭素年代測定では13世紀後半の値が示された。詳細については、既刊の報告書を参照されたい(青森県教委2020)。

【構造】烏帽子は和紙とみられる素材(以下、和紙)の上に目の粗い布(以下、布A)と目の細かい平織りの布(以下、布B)を重ね、透明漆(顔料等を含まない精製漆)を2~3層程度塗布する構造である(図2-a)。布A自体は腐朽消失しており、その痕跡が漆塗膜表面に凹凸として表れている(写真1)。一方で布B及び和紙は一部残存することを確認した(写真2・3)。布Bは塗布された透明漆が浸透したことによって腐朽を免れ、残存したと考えられる。塗膜構造調査においても漆層直下の素材に漆が染み込む個所が確認された(写真4)。同様に和紙にも漆が浸透している可能性が高い。一方で布Aは完全に消失していることから、漆は塗布されなかったと推測される。烏帽子片の一部では素材が折り返される個所が確認でき、縁部と考えられる(図2-b・写真5)。また、部分的に最上層の漆層の上に布Bが貼られており、補強もしくは補修の可能性もある(図2-c・写真6)。

\*青森県埋蔵文化財調査センター

【製作工程の復元】上記から次のような製作工程が復元できる。まず、和紙に漆を塗布しながら成形する。その外面に布 A、次いで布 B を重ね、外面から縁部内面にかけて透明漆を 2～3 層程度塗布する。資料が小片に分かれていることや各分析を行った破片が異なることから、それぞれの分析結果が別個体の状況を示す可能性はあるが、上記を米山(2)遺跡出土烏帽子の構造として提示しておきたい。

## 5 他遺跡における出土例との比較

塗膜構造調査が行われた代表的な遺跡を表 1 に示す。すべての例で布の使用が確認された。西野遺跡群や沖ノ羽遺跡では残存する繊維の観察により、目の粗い麻布と目の細かい絹布の使用が推定されている。本遺跡では布素材の同定を行っていないが、これらの事例から布 A は麻、布 B は絹である可能性が挙げられる。構造については、芯となる麻布の上に絹布を重ね、漆を塗布する構造が一般的と考えられている(四柳2006)。本遺跡では和紙の使用が明らかとなったが、他に紙の使用が確認された事例は、栃木県下古館遺跡と岡山県鹿田遺跡である。下古館遺跡例は絹布の上に紙を重ね、漆を塗布する構造である(田代2012)。鹿田遺跡例では本遺跡と同様に紙を芯とし、布を重ねた上で漆を塗布する構造だが、鉾物粒子を含む漆下地が確認された点は本遺跡と異なる。

## 6 米山(2)遺跡出土漆器について

中世において烏帽子は塗師が製作したされるが(四柳2006)、米山(2)遺跡では漆製品製作の痕跡は認められず、出土漆製品はすべて搬入品と考えられる。そこで、本遺跡出土漆製品の傾向から烏帽子とその他の漆製品との関係を探る手掛かりとしたい。

本遺跡から出土した漆製品は、碗や皿等の什器が中心である。渋下地や簡素な工程の漆下地に 1～2 層の漆を塗布したものが多く、製作技法が簡略化された普及型と考えられる(表 2)。木胎にはケヤキを利用するものが多い。中世以降の碗や皿等の什器では、一般的に高級品にケヤキが選択されるが(四柳2006)、本遺跡では樹種の選択と塗装において矛盾が生じている点が注目される。

## 7 まとめと今後の課題

米山(2)遺跡出土の烏帽子は和紙を芯として 2 種類の布を重ね、顔料等を含まない漆を塗布する構造であることが明らかとなった。また、布で補修したと推測される痕跡が確認されたことは貴重である。今後の課題としては、米山(2)遺跡において烏帽子が出土した意義について、出土遺構や他の遺物との総合的な検討が挙げられる。また、今回筆者の力不足から検討できなかった西日本を中心とする事例を含めた検討も、今後の課題としたい。

引用・参考文献 ※表で使用した遺跡に関する引用・参考文献については各表中に記した。

青森県教育委員会 2020『米山(2)遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 613 集

小田雄三 1983「烏帽子小考」『近世民俗図譜』第 12 巻 小学館

田代隆 2012「下古館遺跡出土の烏帽子について(1)」『研究紀要』第 20 号(財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

宮本馨太郎 1977『かぶりもの・きもの・はきもの』民族民芸双書 岩崎美術社

四柳嘉章 2006『漆 I・II』法政大学出版局